

2005 年日韓教授統一思想研究会
「現代文化と統一思想」

フェミニズム運動とジェンダー概念

河野 恒心

鹿児島国際大学講師

宗教社会学

千葉県浦安市：一心特別研修院

共 催：統一思想研究院 / P A R P 後 援：世界平和教授アカデミー

2005 年 8 月 27 日—28 日

フェミニズム運動とジェンダー概念

ジェンダーフリーの運動と思潮は、男女共同参画社会実現という国の施策とも連動して、社会のあらゆる場面で問題を惹き起こしている。特に初等・中等教育の現場における混乱は深刻なもので、もっとも弱い立場の子供たちが犠牲になっているといわざるを得ない状況である。

本稿はこのジェンダーフリーの思想的根拠の一つとなっているジェンダー概念の出自を明らかにし、その有効性を問うものである。論者によって多義的に使われているジェンダー概念を整理し、評価することが目的である。ジェンダーフリー運動の具体的な問題点については詳細な報告と議論がなされているが、その根拠としてのジェンダーという概念そのものについてはあまり論じられていない。学術的にどう評価すべきか、またその評価の基準をどう見るかなど統一思想からのアプローチをする。

ジェンダー概念は、女性解放運動（フェミニズム運動）と密接な関わりがある。単に既存の社会に対する異議申し立てというレベルではなく、男女関係を闘争関係として規定することで、大きな混乱をひきおこし家族破壊の原因になっていると考えられる。

本来、フェミニズム運動、あるいはジェンダーフリーそのものについて詳細に議論する必要があるが、ここではまずジェンダー概念に焦点を当て、フェミニズム運動については概略にとどめる。

ジェンダー概念の出自

ジェンダー(gender)は、もともと各言語における文法上の名詞の性を意味する用語である。生物学的な性(男女)を意味する用法もあったが特殊なものであった。

1970年代、英語圏の心理学や社会学において、生物学的な性別「セックス(sex)」から性別についての自己認知や社会意識として共有された性別特性を「ジェンダー」として区別する研究が、心理学のジョン・マネー、社会学ではアン・オークレーなどがはじめとし、相次いで発表された。ジェンダーは社会的・文化的性別を意味する言葉として使用されるようになり、特に第二次フェミニズム運動の中で中心的な概念となり先鋭化していく。その後やや変化して、単に性別を表す用語として一般的な用法となり今日に至っている。

日本では、1970年代後半からのウーマンリブと関係あるやや学問的にはアマチュア的な「女性学」が成立する、そののち1980年代後半から「フェミニズム」の用語が使われるようになり、1980年代半ばになって「ジェンダー」という用語が使われる。そして「ジェンダー論・ジェンダー研究」が本格的に始まるのは1990年代に入ってからである。

そもそもジェンダー概念は男女の違いを2つに分けるところから出てきている。生物学的な男女の差、性に対応するものとして文化的・社会的な(あるいは心理学的な)性差をジェンダーと呼ぶ。生物学的な性は生来のものであり、生涯にわたり変更不可能であるのに対し、男らしさ・女らしさ、男だから～・女だから～、男のくせに・女のくせに、男の職業・女の職業などの表現に含意される社会的・文化的性差(ジェンダー)は、時代や文化によってその内容が相対的であり、変更可能と考えるのである。

ジェンダー概念は、ジェンダー論としてすでに広く一般化しているものの、運用・定義においてはその立場により大きな開きが認められる。（以下、括弧は筆者）

- ・セックスは、性染色体によって決定される生物学的な雌雄性で、生殖にかかわる性の側面である。…(中略)…。ジェンダーは、社会的文化的に【規定された】性の側面である。社会が期待する性に関する態度、行動、意識などが異なるため、セックスのような普遍的な性格は持たない<森岡清美：1997>。
- ・（ジェンダーとは）通常、生物上の雌雄を示す「セックス(sex)」と区別され、文化的
- ・社会的に【形成される】「男女の差異」をいう。<社会学辞典：弘文堂：1994>
- ・社会的に【構成され規定された】性差<伊藤公雄：2003>
- ・【社会的からおしつけられた】性別。

セックスとジェンダーの関係

ジェンダー概念が実に多義的であるのは、生物学的な男女（セックス）と社会的・文化的な男女（ジェンダー）、この両者の関係をどう捉えるかで立場の違いがあるためである。

まず分析概念として用いる場合がある。ジェンダーとは文化的・社会的に「規定される」性差である。二つめは生物学的性別の「セックス」と社会的文化的な性差と「ジェンダー」とが密接に関連していると考えられる立場である。代表的な論者にイヴァン・イリイチがいる。前産業社会において男女は固有のあり方をジェンダーといい、男女は役割が異なっても平等な関係は存在するとした。ジェンダーこそが人間らしいものであり、産業化によりジェンダーが失われつつあると危機を訴えた。三つめはセックスとジェンダーとの関連を認めず、ジェンダーはセックスとは無関係に社会的・文化的に形成されたもので、生物学的な根拠はないとする立場である。ジェンダーは社会的・文化的に押しつけられたものである。ジェンダーは社会的・文化的に形成し直すことができると主張する。ジェンダー論者の多くはこの立場である。最後の第四の立場は特に心理学的な研究に依拠する。生物学的性別（セックス）に基づくこととされる男女のパーソナリティは実は社会的・文化的に形成されたものであり、生物学的な根拠がないと主張する立場である。

この最後の立場は、ジェンダーフリーに関係する上野千鶴子、大澤真理などがとっており、もっとも過激である。性染色体レベルの分析によってXY染色体の分布に例外的な事例が見つかることを根拠にして、生物学的な男女の差は不連続な断絶したものではなく、グラデーションのように次第に変化するものだととらえる。男女の違いは程度の差というのであり、男女の脳の働き方の違いや心理的傾向（セックス）はジェンダーによって作られたと主張するのである。このラディカル・フェミニズムといわれる人々の主張によれば、男女の差を強調する伝統的な価値観は粉砕すべきものであって、そのような概念や社会規範を徹底して排除し、ジェンダーにとらわれない（ジェンダーバイアスのない）、ジェンダーフリーの社会の実現を標榜するということになる。

フェミニズムとジェンダー

ジェンダーはフェミニズム運動と密接な関わりを持って誕生し、育てられた概念である。したがってジェンダーを論じる上ではフェミニズムとの関係を見逃すことができない。

元来、フェミニズムとは女性解放思想、あるいは女権拡張主義と訳され、19世紀以来、主に女性の人権、参政権、財産権を男性並みに獲得することを目標として推進された。し

かし主な国では 20 世紀の前半で「婦人参政権」成立し、法的権利も男性並みに獲得したため 1960 年代くらいまでに沈静化していった。これがいわゆる第一次フェミニズム運動である。日本の場合は GHQ の政策の影響もあり急速に女性の法的立場は向上することとなる。

1960 年代の世界的なカウンターカルチャーの浸透の中で反体制運動の中にも男女差別が存在すること、また女性の法的権利が認められても収入・職業・教育などの側面での平等が実現されていないという現実認識によって、「実質的平等」を求める第二次フェミニズム運動が台頭してくる。

第二次フェミニズムの主張

男女間の実質的平等を標榜する第二次フェミニズム運動の目標は主に以下の三つの点に集約される。1) 性別役割分業の否定、2) 「女性イデオロギー」の批判検討、3) 女性の「性と生殖の自己決定権の確立」。

性別役割分業とは家庭、職場、教育の場において、例えば「男は仕事、女は家庭(家事育児)」、「男性は重要な仕事、女性は補佐的な仕事(お茶くみコピー取り)」、というように男女の役割規定が固定的に割り振られることを意味する。当然、これには社会で支配的な家族観、結婚観も含まれる。こうした性別役割分業の否定は「女は女らしく」、「女性は母親として生きることが最良の生き方」など「男らしさ・女らしさなど性別に関わるイデオロギー」、特に「女性イデオロギー」の批判的検討につながる。男女の役割分担についての慣習を、イデオロギーとしてとらえるところに、従来、「自然」的なものとして把握されていた「性差」、「女性的性格」、「母性」などを、生物学的な根拠を持たない社会的・文化的に形成されたジェンダーとしてとらえる立場が現れる。この立場は必然的に家族の問題と女性の就労の問題に取り組むことになる。

「女性イデオロギー」への批判的検討は、性と生殖における女性の主体性の確立という問題（「性と生殖の自己決定権」）へと焦点を移す。従来の性道徳が男性には緩やかで女性にのみ厳しい性規範を要求してきたこと、性の諸問題において女性が男性ほど開放的ではなかったことに対する反発である。そのため女性における「性の選択権」を主張する。また現実にはさまざまな理由で人工妊娠中絶を経験しながら、身体的にも社会的にも負担を強いられているのは女性のみであることにたいする反発として、「人工妊娠中絶の合法化」を求める。これら第 2 次フェミニズム運動の主な主張は装いを変え、ジェンダーフリーという考え方の中に埋め込まれている。

フェミニズム運動の諸派

フェミニズムの運動は、運動の目標、思想的傾向によって リベラル・フェミニズム、マルクス主義フェミニズム、ラディカル・フェミニズムの 3 つに大きく分けられる。

現代フェミニズムの源流は、リベラル・フェミニズムといってよい。フェミニズムの課題は、個人の自由の確保、社会的公正、社会的利益という観点であるが、これらの主張はリベラルフェミニズムを根拠としている。

ところがリベラル・フェミニズムは女性参政権確立以降、しだいに「革命的」であることをやめ、女性の実質的な地位向上については「改良主義的」「漸進主義的」になっていく。そこで「女性解放」を早急に実現するためには、社会階級の対立という社会問題の解

決が先決だとして、社会主義思想を基礎にするマルクス主義フェミニズムが、誕生してくる。女性の「実質的な財産権」に注目し、資本主義体制の中で女性の労働力がどう搾取されているかなど男女の職業上の地位および家事労働に発言し、家父長制的要素の撲滅を訴える。

一方、女性が被っている不利益が、男女の日常的・社会的・政治的な権力関係に根ざしていることを主張し、男女の支配関係に注目するのが、ラディカル・フェミニズムである。従来、「社会科学」においては男女の個人的な問題としてほとんど無視されてきた「性」、「性愛」、「恋愛感情」などを主題として取りあげる。現代社会での男女間の「支配-服従関係」を把握するために、従来、「自然なもの」あるいは「本能的なもの」とされてきた男女の社会関係を、権力関係として位置づけなおす必要があると提起したのである。

このラディカル・フェミニズムから第二次フェミニズム運動の大きなうねりが始まるのである。

有効性の基準

ジェンダーの概念およびフェミニズムの概要を示すことによって、今日特に問題になっているジェンダーフリーの運動の中で、ジェンダー概念の役割が明確になってきた。そこでこのジェンダー概念の評価を試みる。評価をするためには、まず評価の基準を明らかにしなければならない。その基準を統一思想の観点から提示したい。

統一思想の方法論では、存在と発展の根本的な方法として授受法を提起している。また神主義においては、共生共栄共義主義を主張する。また摂理歴史上では2004年以降、後天時代が始まり、それ以前の対立、闘争、相克、不和の時代から、調和、協力、相応、若い、平和統一の時代になったといわれる。以上の条件から演繹すると、調和をもたらすもの・和解をもたらすものが評価されることになる。これが統一思想の観点からの概念、運動、人物に対するひとつの評価基準であるといえる。

その基準に照らしてみるとジェンダー問題を評価する具体的基準は、男女の和合、調和ということにどれだけ役立つのかという観点になる。フェミニズム運動およびジェンダー概念が男女間の調和・和解に、共生共栄にどう貢献したのかを検討しなければならない。ラディカル・フェミニズムの主張する性解放などが、男女の協調関係を推進するのにプラスかマイナスかを徹底して検討してみる必要がある。

ジェンダー概念の評価

さてジェンダー概念の評価の前に、フェミニズム運動の分析をしたい。男女の政治的な権利が不平等であり、特に職業上や結婚に性道徳などが不均衡である場合、それが男女双方のにとってよい状態とはいえず、調和・和合にとり障碍となっているなら、そのことに異議申し立てをするのは両者にとって利益であるといえる。したがって第一次フェミニズム運動によって男女の法的な立場・権利が平等になったことは、評価してよいと思われる。

「異議申し立て」をすることにより事態が、すなわち女性の地位が向上したというのであれば、十分評価すべきである。

一方、第二次フェミニズム運動のように実質的な(結果的)平等を求め、それまでの男女の社会関係を一切否定し、性急に社会変革を求めるのであれば状況はさらに悪化すると思

われる。最終的には男女間の和合・調和を生み出さず、フェミニストたちにとっての女性の地位を向上させるという目標を阻害することになる。そのことはリベラル・フェミニズムでは少なからず自覚されており、フェミニズム運動の先駆者であるベティー・フリーダムも「家庭の価値を優先すること」、女性が働く場合、「それと矛盾しないこと」を一貫して主張している。また日本でも江原由美子なども「男女共同参画社会基本法」の実現という行政にまで影響を与えたフェミニズム運動の進展にもかかわらず、他面において若い世代の女性たちに「フェミニズム離れ」が起きていること、またジェンダーバイアスを解消しようとしても新たにジェンダー・バイアスが生じることなどフェミニズム運動の課題について報告している。結局、第2次フェミニズム運動は、既存の社会に異議申し立てをする戦略から男女の和解と一致、和合を目指す方向へ転換しなければならなかったのではないだろうか。

和合調和というのは男女の片方だけが満足することでは実現しない。両方が満足できる一致点を見出したという事態である。そのためには互いに相手の満足、喜びを前提とした相互作用が必要である。換言すれば互いに「ために生きる」という姿勢をとることになる。この点に関し社会学では、役割理論によって家族内での役割構造、勢力構造を解説することができる。これはジェンダー論の対応策になりうる理論装置であるが、今回はふれない。

ジェンダー概念の評価は、分析概念としてのジェンダー、およびイリイチの使うセックスとジェンダーとの密接な関わり合いを認めるジェンダー概念のみが、男女の和合、調和に貢献できると思われる。セックスとジェンダーの断絶を主張する。あるいはさらに過激に男女の生物学的な違いまで認めようとしない立場は、ジェンダーフリー運動のように男女の社会関係の破壊をもたらすことになる。

河野恒心

参考文献

- 伊藤公雄「男女共同参画が問いかけるもの」インパクト出版会：2003
- イヴァン・イリイチ「ジェンダー」岩波書店：2005
- 江原由美子『フェミニズムとジェンダー』「社会学の基礎」有斐閣Sシリーズ：1991
- 江原由美子、金井淑子編「フェミニズム」新曜社：1997
- 江原由美子「フェミニズムのパラドックス」勁草書房：2000
- 江原由美子「改訂新版 ジェンダーの社会学」放送大学教育振興会：2003
- 大沢真理「男女共同参画社会をつくる」NHK ブックス：2002
- 奥田暁子ほか編「概説 フェミニズム思想史」ミネルヴァ書房：2003
- 落合恵美子「21世紀家族へ 第3版」有斐閣選書：2004
- 坂本佳鶴恵『ジェンダー 男であること女であること』「社会学のエッセンス」有斐閣アルマ：1996
- 瀬地山角『ジェンダー研究の現状と課題』「岩波講座現代社会学 11 ジェンダーの社会学」：1995
- 庄司洋子『ジェンダー』「社会福祉士養成講座 11 社会学 第2版」中央法規：2003
- 千葉展正「男と女の戦争 反フェミニズム入門」展転社：2004
- 野々山久也、清水浩昭「家族社会学の分析視角」ミネルヴァ書房：2001
- 坂東真理子「男女共同参画社会へ」勁草書房：2004
- ベティ・フリーダン著「ビヨンド・ジェンダー」青木書店：2003
- 目黒依子「ジェンダーの社会学」放送大学教育振興会：1994
- 森岡清美ほか「新しい家族社会学 四訂版」倍風館：1997